

	<h1>W.A. Mozart Hiroba</h1> <p>「モーツァルト広場」 SINCE 1995</p> <h2>第31号</h2>
---	--



逸民の画家あるいは再びの人生

モーツァルトへの手紙 (その7)

会員番号 K.618 加藤 明

たとえば、ト短調の変奏曲《泉のほとりで》(K360)の醸し出す叙情を想い起させる或る人物との出逢いがあった。そう、正に一期一会。その人物が素直にモーツァルトを受け容れては、「いい音楽だね」と遠くを眺めていたことを思い起し、その作曲家に話を伝えたくて……。

人は日常にあってどこかに行く。どこかに行くということは、すでに必ずどこかに居る(帰るところをもっている)ということを示しています。

つまり、人はいつもどこかからどこかに往き来してやまない生き物なのです。

いつしか地名が変わっても、人はこうした往来のリズムを変えません。

いや、変えたいと思ってもできないのが現実というものではないでしょうか。

過ぎし初夏のある日、現実という言葉の重みを今さらながら、鋭くも痛切に感ずる出来事がありました。

「道の駅」という地域の拠点には往来のリズムの刻みを極端に長くしている人々が登場してきます。

ほとんどが自転車での旅人ですが、夏は特に年齢を問わずその遊牧的な人間が目立ってくるのです(さすがに女性のサイクル・ツーリストにはまだ一度もお目にかかっていません)。

そんな自転車での旅人のなかでも特筆すべき、

逸民(いつみん・出奔とは異なる)とでも評すべき浮世離れした人物と出逢ったのです。

彼を観察し、一時間ほど対話をしていくなかで、連想した過去の逸民は鴨長明、西行にはじまり、芭蕉、山頭火、はたまた尾崎放哉といった面々でした。

いまにして思えば、大変奇異な出逢いでした。不意撃ちをくらったのです、その世捨て人のような人物の登場に。

その人物の放つ体臭、しぶとそうな小柄な体軀、澄んでキラキラした眼差し、どことなく整った不精な髭が印象的な容貌、そして歯切れのいい言葉の連射。

「このマリーゴールド綺麗ですね……。お店はまだですか？」

産直センター《食菜館くらら》の入り口に並べられたオレンジ色のマリーゴールドを愛でながらその初老の男は訊いてきました。

心地よい初夏の日差しに誰しも浮き浮きするようなマルシェの朝です。

「すみません、もうすぐ開きます。……。どちらからお越しですか？」

年齢的にも、容貌からも何か話しやすそうなそのお客に今度はこちらから儀礼的に尋ねました。

「横浜からですけど……」。

ややしばらくあって、「まあ、もう三年近くも帰っていないんですけどね・・・」。

つづけて、「・・・もう帰るところはないんですよ・・・実はね・・・」。

「(え!)・・・」。

彼がそう言い放ったときの悲壮感のなさに驚き、一瞬ガツンと重い感動の矢が鈍い音とともに胸に突き刺さったのを憶えています。

何も言い返すことのできないまま、その重い感動を引きずりながら、開店作業に入りましたが、彼が開店後いち早く惣菜コーナーから菓子パンを買い求めていたことを後で知りました。

開店後30分ほどして何気なく外に目を移しましたら、店の軒下の青いベンチで店で買った菓子パンをゆっくりと口に運ぶ彼をとらえました。

傍らに、これ以上は到底おさまらないと思わせるほどパンパンに膨れ上がった前後4つの大きなハンガーバックをかかえた年季の入った自転車がありました。

私は「もう帰るところはない」という彼に惹きつけられるように、その青いベンチに向かったのです。

私は彼の横に腰をおとし、隣の温泉を指差し、「お風呂にでもはいりませんか？」とさりげなく勧めました。

「ありがとうございます。この頃は足湯だけにしているんです。いま温泉に浸かったら、もうペダルをこぐことができないかもしれない・・・。以前、温泉に浸かったら、しばらくは動けなくなったことがあるんです・・・身体が甘えるというか・・・」。

なにやら身につまされる思いがよぎるのでした。

この間も二人をつつみ込むようにモーツァルトのセレナードが流れていました。

なぜか、「ここはモーツァルトが終日聞こえる道の駅ですよ」と自慢げに話しながら、彼のことが知りたい衝動を抑えられず、ついに質問攻めに転じました。

彼が淡々と語った物語を要約すると、彼は故郷の静岡県に20歳くらいまで住んでいた。その後横浜に出て約三十年ほど設備関係の会社を経

営していたが、還暦を機に少年時代からの夢であった「絵描き」に専念すべく、三年ほど前に家族を棄て、帰るべき家を棄てて準備に準備を重ね、自転車での旅に出た。

そして、日本全土を巡り、景色を眺め、美しさに感動しつつ絵筆を走らせながら日々己れとの対峙を愉しんでいる、という正に流浪の芸術家なのでした。

絵の話をする彼の子供のようなキラキラした眼は美しいものをたくさん見続けてきた人間の眼であり、これからもその野心をたずさえて生きる人間の眼差しそのものでもありました。

画家のその深い気魄に圧倒されたまま、「北海道に渡ったら神田日勝の記念館に行かれたらいかがですか？」と（自分でもまだ行っていないのに）大好きな画家の話をしたり、この先の画家としての構想などについて訊いたりして随分盛り上がり、充実した対話になったのでした。

達観的に言いますと、「ああ、彼はいま二度目の人生を生きている！」といった感慨が海水の塩のようにどこまでも私の衷心に残りました。

それは期せずして、私の父（父は50歳に満たない短い生涯でした）を想う時の「彼は苛烈極まりない満州での軍隊時代と引き揚げて錦を飾った故郷とで二度死んだのだ」という生き様の対極として捉えられるものでした。

どちらにしても壮絶な生き様であることに違いはありません。

いよいよ彼の出発の時刻がきました。見送りはできないと、こころに決めておりました。

ベンチに立ち寄って途中で投げ出した仕事に気がなっていましたし、なにより胸がいっぱいになり、散り散りになるのを恐れたからなのです。

いつしか流浪の画家は二人で熱く語り合った青いベンチから音もなく姿を消しておりました。

あたかもあの出逢いが幻覚に過ぎなかったかのように。

お別れの直前、画家からの置き土産がありました。

大きなバッグから取り出して見せてくれた桜

鳥のスケッチに魅せられた私は、「この二枚を是非おゆずりください!」と図々しくもいただいたのです。

そのスケッチに画家のお名前を書き込んでもらい、(そうしないとフルネームがわからないままでしたから) 我が一生の宝とすることにしました。

そのとても味わい深い二枚の桜島を書棚にかざり、ときどき「彼はいまごろどのあたりを写生

しているのかなあ」と想いを馳せているのです。

※今年の夏から思うところあって、勤務先の道の駅のホームページにブログを掲載することにした。題して「駅長のぶつぶつモノローグ」。三日ごとの更新を自らに課しており(一年で120編目標)、現在まで40編を書き上げたところである。

本稿はすでにブログに掲載済みの一編を「広場」用に一部改訂したものである。

或る晴れた日に

会員番号 K.478 岡 部 久 子

天気予報をみて夫が言った。「明日は晴。最後の秋日和だ。遠くへ行こう」すぐ賛成。「どこにする?」「南」、「O・K」。

翌日、予報通りの晴れた朝。

ポット2本にお茶と紅茶を入れ車は出発。途中まず給油。セルフサービスのスタンドへ。同じ図柄のカードで夫は迷って、いつものお兄さんに又頼む。「すまないね」「いいっすよ。ヤヤ、ずい分、他へも行ってっすな」「ああ、それ使ってない。みんな捨てて」とっても爽やかなお兄さん! いい日が始まる予感。

風車が白く光っている。「八代さんを思いだすな」八代さんがパラグライダーで飛行した場所がみえる。「まだ飛んでるかな?」「うーん。腹出てきたからなあ」道々にかわるがわるの人を思い出し、海添えに走る。

「何処へ向う?」「まずは本荘へ」「よし。」本荘はすぐ。新しく出来たモダンな形の橋を渡って本荘の街へ入る。「どこへ行く」「道なりに山のある方へ。」坂道になり小学校の前を通過。紅葉の木々の山道。案内板の前で下車。鳥居がある。「新山神社。公園。裸祭りがある」

上の方に2本のアンテナ塔があるが神社は見えない。鳥居をくぐり山道を登る。濡れている落葉の重なり。アンテナ塔の所で周囲を見渡す。左手に鳥海山の秀麗な姿。子吉川がゆったりと穏

やかな表情で街を横切って海へ。鳥海山は長く裾野をのばし、そのまま日本海へ続いて、海は右手に孤を描きどこまでも広く拡がって行く——神社までの道は、まだ先へ続くが途中で引き返し街へと下る。

道幅も街並もすっかり変わって、どこを走っているか分からない。コンビニで車を止め、街を歩く。新しい店の間に昔からの店。園芸店かと間違えた、植木鉢にかこまれた家。シャッターを閉じた洋服店。ショーウインドーに日焼けした昔流行のジャケットを着て二体の男性マネキンが立ったままだった。

ザル、籠、笠、箒を売っている店へ入る。

「ここで、作っている?」「いいえ、いいえもう誰もいません。全部、岩手県のものでしょ」と、中年過ぎの店のお母さんが説明してくれた。落葉を掃く竹箒を買って仁賀保への道をきく。

信号待ちで並んで止まっている車の窓へ「仁賀保は左?」と夫が叫ぶと、その若い男の人が「いいや、右、右」と手をふる。少し考えて「信号変わったら、この車の後について走って」とのこと。助手席に女の子が座っている。今日は土曜日なのだ。恐縮しつつ、親切な車の後について走る。かなり走って前の車が道端へ止まる。降りて行ってお礼を言いガソリンスタンドで今

朝もらったティッシュ1箱を渡すと「いやあ、そんな」と言って受けとってくれた。

黄色い車のあったかな親子。

仁賀保駅前へ、お昼時、到着。すし屋で昼食、休憩。元気が出てから、平沢海岸公園まで歩いて行く。歩いて10分くらいの所。海岸近くの建物の前が賑やか。入口には中高年の女性が並んでいる。「何かあるな」と二人で話しながら道を横切って行くと、すれ違った男性が「シャンソン」と建物前の看板を指さした。

海岸公園は海がすぐそば。晴れていても、もう海は冬の色。広いグラウンドで一組がキャッチボールしている。芝生の場所では、滑り台他の遊具があって親子連れが、数人。子供達や遊

具を見てると昔を、小さかった子ども達を思い出す。二人でアシカが向い合った遊具に向い合って座り、怖かったが、ボタン、ボタンとゆらす。海も午後の日差しも夏のなごりの枯れ残ったハマナスの赤い実も、みんな美しい。そして、芝生は、ふかふかと足に柔らかな感触。

駅前へもどる途中、シャンソン会場の行列は長く道路ぎわまで伸びていた。歌を楽しむ人達がこの静かな小さな町にこんなにいる！

帰路、4時を過ぎて立ち寄った道の駅を出ると、外は急な冷氣。海の夕焼けを反射して山の斜面も赤い。

或る晴れた日の晩秋の一日、私達は、こんな人達に出会って、満ち足りて帰りました。

リンツ“念願”の旅

会友 永井博敏

小学生の頃から「俺の夢は世界で活躍すること」と口にしてきた真(まこと)くんでしたが、よもやその通りになろうとは……。多くの友人知人にとってその後の Makoto's Story は驚きと感嘆そのものでした。彼は現在、オーストリアの国立リンツ美術工芸大学教授。同級生の私は当時の姿を思い出すたびに“彼の夢をかなえたリンツの街、暮らしや仕事ぶり”を直接この目で見てみたいと思っていました。彼の方からも「早く来いよ！」と強く誘われてはいましたが、つつい“念願”のまま長年を過ごしてし



まいりました。

この9月、仕事や諸事情が幸いし、ようやくリンツへの旅を果たすことができました。

ウィーン国際空港で一家の出迎えを受け、アウトバーンをひた走ること約2時間。リンツの中心街を通り抜けた辺り、ドナウ河沿いの小高い丘の斜面に建つ彼の自宅に到着しました。近くには乗馬クラブの牧場があり、後方に緑の森が控えた自然豊かな環境です。

早速、家族ともどもの再会を祝して会食、彼は「やっと来たねが！」と秋田弁を連発。

翌日からは彼の案内で各地の観光地を巡ることができました。出発前に同級生の一人である加藤明さんから「ザルツブルグにもぜひ行って来いよ！」と言われていましたから、モーツアルト広場や生家をも訪ねました。日本人解説者がいたことや日本からの団体客の多いことに驚くと共にモーツアルトが広く世界の人々の関心を集めていること、とりわけ日本人に深く親しまれているのだと再認識させられました。

さて、リンツの街は古い歴史を感じさせるさまざまな建物、中でも抜群の迫力と荘厳さを誇る大聖堂は見事なものでした。彩色輝くステン



リンツの大祭堂

ドグラスが張り巡らされた内装は敬虔な祈りを支えるにふさわしい美しさだと感じました。ま



三浦真君 (K.527) 宅にて会食での1コマ

た、かつては修道院だったという大学校舎（彫刻科キャンパス）の彼の研究室を訪ね、作品製作や学生教育に励んでいる日頃の姿を想像しながら見学することができました。

夢を育て、ヨーロッパの文化・芸術に活躍の場を得た我が同級生をいっそう誇らしく、また嬉しく感じることでできた“念願”の旅でした。

以上

酒とモツの日々 (31)

会員番号 K.488 佐藤 滋

モーツァルトが12月5日に亡くなって、今年で222年となります。その妻コンスタンツェは、モーツァルトの天才を引き立たせるための悪役として描かれることが多いのですが、実際は愛し合う普通の夫婦だったようです。モーツァルトがそそっかしく奔放で、コンスタンツェが冷静かつ打算的だったようですが……。

夫婦2ショット (222) 記念の年なので、今までと趣向を変えてこの夫婦をモデルに、小劇場を書いてみました。ご笑読ください。

酒・モツ小劇場「賢者の告白パート2」

ある所に、深く愛し合う、貧しい夫婦がおりました。クリスマスプレゼントに夫は、大切な

懐中時計を売って、妻の美しい髪を飾る髪飾りを買いました。妻は命より大切な髪の毛を売って、夫の美しい懐中時計にぴったりな金の鎖を買いました。自分に出来る精一杯の贈り物が、悲哀と悔恨にみちた告白となった後、互いの失敗を認め合いながらも、二人はいっそう固い絆で結ばれていることを実感するのでした。告白の後で……

夫「ねえコンスタンツェ、僕には夢が三つあるんだ。聞いてくれるかい？」

妻「まあ素敵ね。それは、どういう夢なの？」

夫「小さな夢、中くらいの夢、そして、とても大きな夢の三つなんだよ。」

妻「では、小さな夢から教えてくださいな。」

夫「それはね。僕の方が君より先に死ぬことさ。君の死は僕には耐え難いからね。」

妻「勝手な夢なのね。では、中くらいの夢は？」

夫「それはね、君が僕を看取ってくれることさ。これで怖がらずに死ねるからね。」

妻「寂しいことをおっしゃるのね。最後に一番大きな夢を教えてください。」

夫「一番大きな夢。それは僕が死んで、もし生まれ変わったら世界中を探して君の生まれ変わりをを見つけだし、もう一度プロポーズすることなんだよ。」

妻「・・・でも、もし私が男に生まれ変わっていたら、どうなさいますの？」

夫「そんな些細なことは気にすることはないんだよ。人間、だれにでも一つくらいは欠点があるものだからね。」

大好きなポンチ酒を飲みながら語る夫。見つめる妻の坊主頭から、髪飾りが静かに転げ落ちるのでした。夫はあまりにも無邪気で自分勝手でした。愛にあふれてはいても、それはいつも自分を中心に回っている世界から届く優しさだったのです。

けれども妻は、そんな夫を深く理解していました。自分の笑顔がどんなに夫を力づけているか、創作のエネルギーを与え続けているかを、彼女はよく知っていたからです。

彼女は、美しさの中に賢さを、微笑みの中に数多くの涙を知っていて、さらに妻として幸せである表情を夫に示し、勇気を与えることが出来る女性だったのです。

没後222年。 夫婦円満は創造の源泉、というお話でした。

「たのしみは 春の桜に秋の月 夫婦仲良く三度食う飯 : 五代目 市川団十郎」

(モーツァルトと同時代の歌舞伎役者)

事務局より

早いもので2013年も終わりを迎えようとしています。皆様にとってどのような1年でしたでしょうか？国内ではNHKのドラマ「あまちゃん」が大ヒットを飛ばし連日北三陸には多くの観光客が訪れているとか。また野球では東北楽天が日本一と東北を元気にしてくれる話題が多かったと思います。国外に目を向けると多くの自然災害が起こりたくさんの人が苦しんでいました。

加藤代表のコラムを読み思い出したことがあります。私も10年前まで横浜に住んでいま

した。12月になると何故か故郷を思い出す機会が増えるんです。いつまでも帰る場所があると言うのは当たり前のものであっても幸せな事ですね。平和に普通に暮らすことができる幸せをかみしめながら年を越したいなど感じた次第です。

さて今後も会報の発行を続けるためにも会員の皆様からのメッセージ、投稿も受け付けております。代表の加藤もしくは事務局の本田までお気軽にお尋ねください。

(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H25年12月現在110名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田 (事務局) 080(1673)8322